

令和4年度第41回
沼津市わたしの主張大会

沼津市教育委員会

令和四年度 第四十一回

沼津市わたしの主張大会

令和四年度 第四十一回 沼津市わたしの主張大会 開会挨拶

沼津市教育長 奥村 篤

今年で四十一回目を数えるこの大会は、発表者の皆さんの先輩にあたる多くの方々が積み重ねてきた歴史と伝統を脈々と引き継いでいる、誇りある大会です。私は毎年この大会で、中学生のポテンシャル・可能性に頼もしさを感じ、大きな感動をいただいております。

この二年で私たちの生活は、新型コロナウイルスの影響により、大きく変化しました。世界に目を向けますと、ロシアによるウクライナへの侵攻の悲惨な光景に大変胸を痛めています。日本が平和で民主的な国家として、国際社会に貢献していくためには、教育の果たす役割が極めて大きいものであると、教育に携わる者として改めて責任の重さを感じています。

命の危険に晒されながら、家族を失った子供たちに思いをはせ、その上で事実を知ること、努め、友達と意見を交わすのは大事なことだと思えます。両国の歴史、環境問題、食料やエネルギーなどの世界経済への影響など、全てがSDGsに関わる問題です。自分たちが侵攻を止められなくても、この問題を考える仲間を増やすことが、平和を守る一歩につながると思っています。

そして、未だ終息の見えない新型コロナウイルスは、引き続き私たちの前に立ちはだかります。皆さんが困難な状況を乗り越えていく中で身に付けていく感じる力や考える力は、今後予期せぬ出来事に遭遇したとき、必ず、挫けずに立ち向かっていくための原動力となるはずで。

本市では昨年三月、新たな「沼津市教育基本構想」を策定し、その目的を「誇り高い沼津を創造する 貴き志を持つ人づくり」として、「人間力を磨く教育」と「地域総がかりで取り組む教育」を進めております。

この大会は、自分の考えを相手に分かりやすく話すこと、相手の話を正しく理解すること、多様な考えに触れ自らも考えることで、他者を尊重するなど、人間力を磨く良い機会になります。また、中学生の素直な思いや強い志から、多くの気づきを得ていただき、地域総がかりで子どもたちの成長を支えていただければ幸いです。

沼津市は来年、市制百周年を迎えます。私は、皆さんが、沼津市の次の百年を担う、貴き志を持つ人として活躍することを楽しみにしています。

終わりに、大会の開催にあたり、ご協力をいただきました先生方や保護者をはじめとする関係者の皆様には、心から感謝申し上げます。

目次

○ 私だからできるボランティア	第一中学校 三年	尾崎 心海	1
○ 「言葉にして伝える勇気」と「受け止める思いやり」	第二中学校 三年	川島 寧音	2
○ 小さな命を守るために	第三中学校 三年	井上 由唯	4
○ 一人ひとりが	第四中学校 三年	萩原 実奈	5
○ 言葉の先にあるもの	第五中学校 三年	朱 優美子	7
○ 意見を言える環境と安心感	片浜中学校 三年	篠原 亜衣梨	8
○ 同じ技術でも	金岡中学校 三年	齊藤 すみれ	10
○ 言葉のもつ力	大岡中学校 三年	大野 愛梨香	11
○ 新たな自分との出会い	静浦小中一貫学校 九年	秋山 雄翔	13

私だからできるボランティア

第一中学校 三年 尾崎 心海

誰かの心を救ったことはありませんか。誰かの助けになったと実感したことはありませんか。

数年前までボランティアといえば、災害の被害地でがれきを撤去したり、支援物資を配ったりすることを思い浮かべていました。まだ子どもの私には誰かのために考えて行動するボランティアは、無理だと思っていました。しかし、ヘアドネーションとの出会いが私の考えを大きく変えてくれました。

「ヘアドネーションって知ってるかな。」

私は初めて聞いたその言葉にとっても興味がわきました。自分がなんとなく伸ばしている髪が、誰かの役に立つというのです。ヘアドネーションとは、脱毛症や無毛症、がん治療の副作用で髪を失った子ども達に、寄付された髪の毛を使って、医療用ウィッグを無償で提供する活動のことです。本物の髪の毛だけを使ってウィッグを作るのですが、受け取る子どもの年齢と同じくらいの若い人の髪が一番良いとされています。そうです。十代の私たちが、困っている同世代の子ども達を助けることができる活動、それがヘアドネーションなのです。髪を伸ばすことが好きな私ならできるかも、これは私だからできるボランティアかも。そんな思いから四年前、ヘアドネーションをするため髪を伸ばすことを決めました。

その日から、私はウィッグを待つ子どものことを考えるようになりまし

た。自分の髪を失った子ども達は、病気の治療のため、体力を落とし、その上、髪を失って精神的にもつらい日々を送っています。外出したくても他の人からどう見られているのかが心配になり、引きこもってしまうことも多いそうです。私は自分の髪の毛がお気に入り、少し自慢でもありました。そんな自分の髪で誰かのつらい思いや、不安な心を救えるのなら、髪を伸ばそうと思うようになりました。

目標の長さに到達するまでにはとても時間がかかりました。その間は髪が重たく、夏は暑かったり、冬は濡れると寒かったです。簡単ではありませんでした。四年前かけてやっと去年の夏にヘアドネーションをすることができました。ウィッグが作りやすいように私の髪を八つほどに分けて結びました。長さを調節し、一本一本ジョキジョキという音と共に切られていきました。頭がどんどん軽くなるにつれて、嬉しいような悲しいような気持ちがあがってきました。待ちに待ったヘアドネーションができて嬉しい気持ちと、長かった髪が短くなることへのさみしさが半分半分です。でも私には後悔がありません。切り終わった後、鏡を見ると私の髪も顔もスッキリしていました。束ねられた髪はずっしり重く、とても私の頭にあっとは思えないほどでした。結局、四十二センチメートルの髪を寄付することができました。

私の寄付した髪がどんな子のもとにたどり着いたかは分かりません。しかし、ネット上にはウィッグの提供を受けた子どもと家族の言葉がありました。

「素敵なウィッグが届きました。柔らかくてさわわり心地もいいそうです。

これを着けて学校に行ける日为目标に頑張ると言っています。本当にありがとうございます。」

ヘアドネーションをすることで、誰かの心を救うだけでなく、感謝され、ボランティアなんて自分には無理だと思っていた私の心も救ってもらった気がします。

ボランティアは数え切れないほどあり、その数だけ誰かの心を救ってくれていると思います。自分には無理だと決めつけず、自分にもできる、自分からできるボランティアがきつとあるはずです。自分だからできることを探す。この時点ですでにボランティアは始まっていると私は思います。みなさん、ボランティアで誰かの心を救ってみませんか。

「言葉にして伝える勇気」と「受け止める思いやり」

第二中学校 三年 川島 寧音

「何か怒ってるの?」

言葉にできず、不服な表情をするしかなかった私に、友達は言いました。私は心の中で、(言ったら言ったで喧嘩みたいになるからな)と思い、黙っていたのです。その時の私の顔は何か言いたげだったに違いありません。でも自分の思いにふたをしたつもりでも、仲の良かった友達とは何となくぎくしゃくした関係になってしまい、こじれ、二人の間には暗い空気が流れてしまいました。

皆さんは、自分の思いや感情をきちんと言葉にして伝えることはできていますか?また、相手が伝えてくれたことをしっかりと受け止めることはできていますか?

私は、感情がすぐに顔に出してしまうタイプです。特にマイナスな思いがあるときは分かりやすく出てしまっていました。相手を傷つけるつもりなどありません。でも結果として私の態度で傷つけることになっているのです。私はそんな自分と自分が作り出してしまった状況にすごく悩んだ時期がありました。

自分でもどうしたらいいか分からず、母に友達とのやりとりを聞いてもらったときでした。私は表情の暗い私を心配してくれた友達に「何でもない」と言っていたこと。これを聞いた母は「相手に対して思っていること、自

分の気持ちをしつかり伝えてみよう」と指摘してくれました。

「言葉にしなければ伝わらない」

自分の思いを言葉にしないまま、相手に任せるという自分勝手な甘え。伝えなければ伝わらないという基本的な考えが欠けていました。

母の言葉から、私は自分の思いを言葉にしてきちんと伝えようと思いましたが、でも、言葉にすることには恥ずかしさや恐れがありました。もし、言うてから悪い方向に行ってしまったらどうしよう、でも、伝えたいことはあるのです。もし傷つけたら……。自分の思いや考えをきちんと言葉にするのは簡単ではなく、何度も何度も考えるうちに、自分の思いがまとまっていくなを感じました。

友達に時間をもらい、自分の思いを伝えられた日、友達は「伝えてくれてありがとう」と、私の思いを受け止めてくれました。私は同時に感謝も伝えました。私のために時間を作って聞いてくれたこと、受け止めてくれたことへの感謝です。何度も丁寧に考えてよかった。喧嘩のようにには全くならず、私の中で重くのしかかっていたものがすうっと晴れていくのを感じました。

この体験から、自ら相手に「言葉にして伝える勇気」をもつことで、人間関係を良好にすることができ、「受け止める思いやり」があることで質の良いコミュニケーションを取ることができると知りました。

ネット環境が充実し、SNS上では多くの新しい言葉や考えが日々飛び交っています。それで互いの言葉で直接伝え合う場面が増えているかというところではない気がします。

SNS上では長い文章は、くどい、重い、と思われがちです。短い言葉で、テ

ンポ良く瞬時に発信することが、親しさにもつながっていると感じます。早く、簡潔に伝えようという気持ちは人間関係を良好に保ちたいという気持ちの表れです。しかし、短い言葉のやりとりは、具体的な部分が伝わらず、誤解を招くときもあります。言葉を省略したり、表情だけに頼ろうとしたりするとより良い人間関係を築くことは難しくなってしまう。

だから、長くなってしまったとしても、相手に伝わるようにきちんと言葉にすることが、相手にとっても、自分にとっても大切なことだと思います。

そして、受け止める側は、相手の話の肯定から入ることで伝える側も伝えやすくなります。

私は、何か伝えたいことがあるとき言葉にして上手く相手に伝えるために、悩み、自分の思い、考えを試行錯誤し、まとめていくことが自分の成長につながり「言葉にして伝える」ことの大切さに気づくことができると思います。また受け止める側も、伝えようとしている相手に対して、何を伝えたいのだろう、何を思っているのだろう、と相手の話に寄り添って受け止める気持ち、思いやりを持って会話をすることでお互いの勇気、思いやりに気づけるはずです。

私と同じような悩みを持っている人、コミュニケーションに苦手意識を持っている人、たくさんの方が楽しく、気持ち良くコミュニケーションを取ることができるとを願っています。

小さな命を守るために

第三中学校 三年 井上 由唯

皆さんは、日本でどれだけ犬や猫が殺処分されているか知っていますか。二〇二〇年の記録では犬と猫合わせて約二万三千匹が殺処分されています。犬は約四千匹、猫は約一万九千匹もの命が奪われているのです。

私は、このような現状を多くの人に知ってもらい、動物の殺処分を減らしていきたいと思っています。苦しんでいる動物たちに恵まれた暮らしを届け人間と動物が共に幸せになれる世界になってほしいと願っています。

私が初めて猫を飼うことになったのは、小学校五年生の時でした。飼い始めてからは、「動物を飼うということは命を預かるということ、最後まで責任をもって面倒を見なければいけない」ということを何度も親に聞かされました。私もわかっているつもりでしたが、その「最後」というのはきつと自分が大人になってからの話だ、と思っていました。しかし、昨年十月、愛猫が癌であることがわかり、十二月に亡くなってしまったのです。まだ四歳にもならない若さでの早すぎる死は、私たち家族にとっても悲しいものでした。しかし、このようなことも含めて動物を飼うということなのだ、と改めて思い知らされた出来事でもありました。動物は、話すことができません。だから飼い主が動物に寄り添い、世話をすることが大切です。動物を飼うときには、もしその動物が大変な状況になっても、しっかり寄り添って、最後まで見届ける覚悟があるのかをもう一度考えてほしいです。

私の家では今、新たに猫を二匹飼い始めました。私たち家族は、その猫たちと静岡市で行われた譲渡会で出会いました。その譲渡会はいろいろな事情で飼い主がいらない猫を保護して、譲渡する動物保護団体の方たちによって行われています。多頭飼育崩壊や経済的な理由などにより飼われなくなった猫、または野良猫が保護されることが多いようです。私が飼っている猫は多頭飼育崩壊から保護されたそうです。多頭飼育崩壊は避妊手術や去勢手術を行わないことで子供が次々に生まれてしまい、最終的に手に負えなくなってしまうことを言います。そのようなことは現在珍しいことではなく、新型コロナウイルスにより自宅で過ごす時間が増えたことでますます増えています。それが原因となり、多くの動物が殺処分されることにもつながります。

我が家に猫を迎えるにあたり、動物保護団体で活動している方にお話を聞く機会がありました。少しでも多くの動物の命を救い、幸せに過ごしていけるように、新しい飼い主を探したり、飼い主が見つからない場合は保護主さんのところで責任をもってお世話したりしているそうです。また、里子に出した猫たちが幸せに暮らせるように飼い主さんと定期的に連絡をとったり、困っていることがあるときはフォローもしてくれます。この方たちは、活動をボランティアとして行い、賛同してくれる方からの援助もたくさんあるそうです。私は譲渡会に参加することで、小さな命を守るために一生懸命に活動している人がいることを、身をもって知ることができました。

動物が好きだから、かわいいから、という理由で飼う人は多くいると思います。もちろん、飼っている動物をかわいがることが大切です。しかしそれ

だけではなく、動物を飼うことで人間は動物から癒しをもらうことができ、そして動物は居場所を与えられ、命をつなぐことができる。私は考えます。動物を飼うということは、人間と動物の両方を幸せにするということ、多くの人に知ってもらいたいです。

動物の殺処分を減らすためには、全員が今の状況を知り、その問題について考えることが大切です。他にも私たちが動物のためにできることはたくさんあると思います。動物を飼おうとされているときに、ペットショップへ行くことだけでなく、譲渡会へ行くことも考えることができれば、人間と動物の距離が更に縮まるのではないのでしょうか。

私は人間の勝手な行動により、不幸な動物がいるということをご皆さんにも知ってほしいと思います。殺処分をすべてなくすることはできません。ですが、少しでも減らしていけるよう、私は、私にできることをしていきます。

一人ひとり

第四中学校 三年 萩原 実奈

突然ですが、皆さんは「リトル・マーメイド」という映画を知っていますか。海の底の王国に住む人魚姫のアリエルと、人間のエリック王子とのラブストーリーが描かれたディズニーのアニメーション映画で、一九八九年に公開されてから三十年以上経った今もなお、多くの人から愛されています。

そんな、映画「リトル・マーメイド」が近年実写化することになったのですが、この実写化をめぐる問題がネット上で波紋を呼んでいるのです。

その問題とは、主人公のアリエル役に黒人の女優が抜擢されたということです。映画「リトル・マーメイド」の主人公であるアリエルは、赤い髪に青い瞳、そして白い肌をもった人魚ですが、今回の実写化のアリエル役として選ばれたのは、ハリ・ベイリーというアフリカ系アメリカ人でした。ハリは、アニメーションのアリエルとは対照的に黒色の肌を持った女優であったのです。この事実には、一部のファンやネットユーザーたちからは、「アニメのアリエルと似ていない」「アリエルは白人なのになぜ黒人の女優が選ばれたのか」などの不満の声が上がり、ツイッター上では「#NotMyAriel（私のアリエルじゃない）」というハッシュタグがつけられて一時ワールドトレンド入りするなど、批判を呼ぶことになってしまいました。この事態にディズニー側は、リトル・マーメイドの原作の作者はデンマーク人であることから、「デ

ンマーク人でも黒人として生まれる可能性はあるし、まず第一にアリエルは国際的な流域にある海底王国に住む人魚である。」と、アリエルが黒人でもおかしくないことや、そもそも海底王国では人種という概念がないことを主張しました。ハリーのことは、「卓越的かつ革新的で、才能に満ち溢れている」と評価しています。

このことを知ったとき、私は、少し複雑な気持ちになりました。私自身、映画「リトル・マーメイド」は大好きな作品でした。だからこそ、実写化するならば、私が幼い頃から慣れ親しんだアニメのアリエルに、なるべく近く近く再現してほしい思いがありました。しかし、だからといって、本人が傷つくような言葉を使ってハリー自身を否定するようなコメントをSNSに書き込むのは、間違っているのではないのでしょうか。

みなさんは、この問題についてどのような考えを持ちますか？

私たちは誰しも、自分と違う人や異なる考えを持つ人を無意識に避けたり、敬遠したりしてしまう部分があると思います。そして、それがひどくなると「差別」が生まれてしまうのです。

今の日本には大きな差別問題はないと思っている人も多いかもしれませんが。自分には関係ないことだと、心の片隅で感じている人もいるでしょう。しかし、本当にそうでしょうか？自分自身の生活を振り返ったときに、他人と意見がぶつかった場面で、少数派の意見の人たちや自分と違った意見の人たちを敬遠したり、集団で仲間はずれにしたりするようなことがなかったでしょうか。こういったことで苦しんだり悲しんだりする人がいたとしたら、それはやはり、「差別問題」と捉えるべきだと私は思います。

今回の実写化を巡った一連の出来事のような、人種的な差別だけでなく、性別の違いによる男女差別、国籍の違いによる外国人差別、障がいを持った人や高齢者に対する差別など、世界には多くの差別問題が存在しています。今世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスに関する差別も報告されています。自分が感染することを心配するあまり、その警戒心が行き過ぎてしまつて、感染した人たちを差別する言動につながってしまうのです。

世界人口は現在七十九億人。その中で、自分と全く同じ容姿、性格を持った人はいないでしょう。七十九億人の一人ひとりにそれぞれの個性があるのです。その個性に優劣をつけている人がいるから、今でも差別がなくならないのです。自分と違うから、普通じゃないからという理由で他人を見下したり差別したりするのではなく、お互いの違いを認め合い、尊重しあっていくことが大切だと思います。

私の主張を聴いてくれた方の心が少しでも動くこと、そしてその小さな動きが連鎖して、世界を変える大きな力になることを信じています。

言葉の先にあるもの

第五中学校 三年 朱 優美子

私には、忘れることのできないとても楽しかった思い出があります。

それは、私が小学校低学年の頃のことです。

私の両親は中国出身です。その日は、母の友達とその子どもと一緒に、世界的に有名な大きな遊園地に行きました。その子は、私よりも少し年上の男の子でした。彼と会うのはその時が初めてでした。彼は中国で生活しているので日本語を話せません。私も中国語を話せなかったため、言葉が通じませんでした。そのため私は、言いたいことを母に話し、それを中国語で伝えてもらうようにしていました。

昼食の時間になっても、私はまだ言葉の壁を感じていました。そこで、(英語なら少しは話せるかもしれない)と思い、それを母に伝えてもらいました。しかし、彼の話す英語は小学生の私には難しく、理解できませんでした。その時彼は、少し怒っているようでした。

午後になって、母がある提案をしました。「二人だけでアトラクションに乗れたら、二人にポイントをあげる。それが七つたまると何でも欲しいものを買ってあげる。」と。今思えば、二人だけでコミュニケーションをとることをあきらめかけていた私に、間違えてもいいから積極的に声をかける勇氣を持ってほしくて、このような提案をしてくれたのだと思います。

それを聞いて幼かった私たちは、二人だけでいろいろなアトラクションに

乗ることにしました。

遊んでいる間は言葉なんていりませんでした。叫んだり笑ったり、アイスを買って二人で食べたりしました。その頃にはもう、ジェスチャーを使って二人だけでコミュニケーションがとれるようになっていました。

そして、たくさん遊び回った最後に、私たちはおみやげを買いに行きました。そこで私たちは、くまの大きなぬいぐるみを買いました。同じものを二つ、おそろいで買いました。

帰りのバスでは、二人でぬいぐるみを使って遊びました。中国語でも、日本語でも、英語でもなく、「心」で会話をしていたのだと思います。おかげさなようだけれど、自分の声に心をのせることで、私たちは仲良くなれたのだと思います。こうして、私の最高に楽しかった一日は幕を閉じました。

私の親族は皆中国語を話します。しかし、私はこの日まで言葉の壁を感じたことはありませんでした。なぜなら、彼らは日本語も話すことができるところからです。学校で英語を習うときも、先生は日本語で教えてくれるので、英語が話せなくても困ることはありませんでした。

しかしあの日初めて、言葉が通じないということの不便さを身にしみて感じました。相手の言いたいことを理解できないことや、そのせいで相手が嫌な気持ちになってしまうことは、とても悲しいことでした。

けれども、あの体験から同時に、言葉がなくても心を通わせることはできると知ることができました。お互いに一生懸命相手を知ろうとして何か行動することができれば、絆は次第に深まっていくのだと思いました。そしてそれは、たとえ言葉が全く通じない相手でも同じなのだと思ってきました。

た。

もちろん、心でなにもかもを伝えることは不可能です。言葉を使えた方がずっと楽で、現実的だと思います。しかし、私が言いたいのは、「言葉」を使う出発点が「心」にあるということです。「心」があつて、それを表現するために「言葉」があります。そして人は皆、自分のことをわかってほしい、自分の想いを伝えたいという「心」、そして、相手を理解したいという「心」を持っています。その「心」というのは、現在世界共通語として使われている「英語」よりもずっと、世界共通語なのではないかと思えます。

だから私は、「言葉」の先に「心」があるということ胸に、自分の心をもっと豊かに成長させていきたいと思えます。そしてこれから勉強して中国語が話せるようになったら、もう一度彼に会って、今度は「心」と「言葉」で話ができることを楽しみにしています。

意見を言える環境と安心感

片浜中学校 三年 篠原 亜衣梨

みなさんは、「教室はまちがうところだ」という詩を知っていますか。私は、「教室はまちがうところ」ではなく、「まちがいが受け入れられるところ」であるべきだと思います。人間は、思考や感情がある生き物ですから、誰しもが考えや意見を持てるはずですが、しかし、多くの人は集団の場においてそれを話すことを苦手としています。それは、他人からの目を怖がったり、間違いを恐れたりしているからではないでしょうか。

人が安心して意見を言えるためには、「安心して意見が言える雰囲気や空気感」がもっとも大事なものであると私は考えています。中学一年生の頃、私は合唱の指揮をしていました。合唱をよりよくするべく、指揮者である私はよく意見を言っていました。私は実際人前で喋ることがとても苦手です。最初はたどたどしく、うまく意見を伝えることができませんでした。しかし、クラスの人たちはそんな私を笑うのではなく、受け入れる反応をしてくれました。その皆の反応が、私が安心して意見を言える環境だったので、この体験から自分の意見を安心して言うにはまず周りが安心できる雰囲気をつくるのが大切なのではないかと思えました。

日本の学校教育が抱えている大きな課題の一つに、不登校生徒の増加があります。令和二年度の全国小中学校では十九万人以上もの児童生徒が学校に来ることができていない現実を知りました。私の友達の中にも学校

に登校していない人や相談室登校をしている人がいます。しかし、最上級生となった四月、これまで相談室登校だった友達が生徒会が教室で過ごすようになりました。担任の先生からは、「全員が安心して生活できるように、絶対に一人にしない雰囲気作りを大切にしていこう」と何度も話をされてきました。自分を変えようと頑張っている友達のと、担任の先生の言葉によって、心の矢印が自分に向き、「人のために自分ができる最大限のことをしたい」と思うようになりました。

今の私にできること。それは「安心感」を生み出すことだと思います。しかしその安心感はどこから生まれてくるのでしょうか。今の私には、私なりに出した答えがあります。安心感を生み出すために今の私にできること、今の私がしなければいけないことは……

一つ目は「友達を絶対に一人にさせない」ことです。周りに誰かがいてくれる環境と誰もいない状況では安心感が生まれるところか、不安が募る一方で意見を言える環境とは程遠いです。誰かが歩み寄ることで、「一人じゃない」という安心感が生まれるはずは……

二つ目は「反応をする」ことです。授業の話し合いの中で意見が出ずに長い沈黙が続く、誰かが勇気を振り絞って意見を言ったとしても何も反応がなかったとき、勇気を振り絞って意見を述べた人はどういう気持ちになるのでしょうか。反対に、自分の意見に対して周りが反応してくれるとどうでしょう。誰かが意見を発したとき、しっかりと反応を示すことは「受け入れられた」という安心感につながるはずです。それは普段の会話からも同じで、反応が返ってくると会話が続くように、反応することは安心感を生み

出すにあたって大切な要素だと思います。

三つ目は、「相手を尊重すること」です。お互いを認め合う中で信頼感が生まれ、「私は受け入れられている」という安心感につながっていくと考えます。

教室の中に「安心感」を生み出すのは、先生がしてくれるものでも、リーダーがしてくれるものでもなく、そこに所属する私たち一人ひとりの小さな意識です。「間違いが受け入れられて、堂々と失敗ができる」、そんな「安心感」のあるクラスを作ることができたら、どれだけ居心地の良い環境になるのでしょうか。今日も、これからも「安心感」を生み出すために、私にできる小さなことに全力を尽くしていきたいと思っています。

同じ技術でも

金岡中学校 三年 齊藤 すみれ

戦争とは一体、何なのでしょう。多くの人が、なぜ戦争になっているのか、その本当の理由さえ知ることがないまま、顔も見られずに、大切な人と一緒にいられずに、目を閉じていくことに終わりはないのでしょうか。

最近、私は画面越しに、軍事侵攻の様子を見ました。逃げ惑う人々の目には、悲しみ、苦しみ、憤り、やるせなさが写っていました。これらはどれも私と同じ「人間」がつくり出したものでした。

そんな中、冷たい音を響かせ空を切り裂いていったのはミサイルでした。まるでテレビのチャンネルを替えるみたいにボタンが押され、でも変わったのは戦地の人々の表情で。ただただ涙が流れました。私には、どんなに五感を研ぎすましても、声も、音も、においも、戦地の「本当」を感じることはできませんでした。

みなさんにきいてみたいことが四つあります。ティッシュペーパーを使ったことがありますか。電子レンジを使ったことがありますか。ラップを使ったことがありますか。インターネットを使ったことがありますか。

あるとき、母が私に、

「戦争にルーツがあるものがたくさんあるんだよ。身近にね。」

と言いました。私は、

(あんな恐ろしい技術、今でも使われているわけがない。身近になんてない

のに。)と想像すらつかず、調べてみることにしたのです。

先程の質問に、何度頷きましたか。あれらは全て、戦争にルーツのあるものです。まず、ティッシュペーパー。今では生活必需品となり、ポケットにも入っているとします。しかしこれは戦時中、ガスマスクのフィルターとして生まれてきたものです。次に電子レンジ。家事の手間を省いてくれる、大きな存在です。しかし、ここに使われているマイクロ波は、かつて食べ物ではなく人の肌を加熱する軍事技術でした。そして、ラップ。今ではキッチンに欠かせないこの道具が、かつて守っていたのは、食べ物ではなく銃弾でした。銃弾を雨や乾燥から守っていたのです。いつでも、敵を撃ちぬけるように。最後は、インターネット。私も調べることに利用しましたが、とても身近なものです。ですがこれも、周りとの繋がりを作ることで、兵器を確実に、精度を上げて利用するためのシステムでした。

こんなことを調べた後日、弟とカップケーキを作りました。材料をインターネットで調べ、電子レンジで温め、ラップで包んで。そしてふと、思ったのです。インターネットの、周りと繋がり、必要な情報を的確に絞る力。これがあつたから、私たちは楽しく、おいしいケーキを作れた。でもこれがあつたから、精度を上げ、打ち上がる兵器を恐れ、前を向けなくなった人もいます。電子レンジの、マイクロ波という技術があつたから、ケーキは膨らみ、私たちは時間が経つのが楽しみだった。でも、その技術があつたから、時間が経ってしまうのが怖かった人だっていた。ラップというものがあつたから、私たちはケーキをあげる人の顔を浮かべて、思いを込められた。でも……。

「技術には向きがある」そんなふうに思いました。無ければ多くの人が困

るような技術。現代でも欠かせない技術。前に向かって進めば人々の生活を豊かに、命を育めたものなのに。後ろへ進んだことで、人々の生活を、命を壊すものになっていた時があったなんて。

戦争は災害のように推測のできないものではありません。それに、怒りよりも冷静な判断を伴うことが多いと思います。だからこそ恐ろしいのではないでしょうか。声をあげたら、戦争を大きく動かす人の耳に入りそうなのに。またその人の目には、たくさんの選択肢が映るはずなのに、その中から戦争を選んでしまうから。

新たな技術が、終わりのない直線の真ん中にあります。前に進みますか。後ろに進みますか。決めるのは私たちです。私たちのあげた一つ一つの声が、どちらかの向きに技術を押し出します。冷たい涙のもとではなく、あたたかい涙のもとに技術を押し出したくはありませんか。

言葉のもつ力

大岡中学校 三年 大野 愛梨香

人と人が関わるうえで、必要不可欠な「言葉」。私たちが普段何気なく口に出している言葉。その言葉には、人を勇気づける力や励ます力があります。

たとえば、「ありがとう」という言葉。あなたは、一日に何回言っていますか。「ありがとう」と人に言われたときどんな気持ちになりますか。私は、一日に「ありがとう」と何回言ったか数えたことがあります。落とした消しゴムを友達に拾ってもらったとき、係の仕事を手伝ってもらったときなど、一日に何度も口にしていました。また、友達に分からない問題を教えたときや誕生日プレゼントを渡したときなど、一日に何度も「ありがとう」と言われたこともあります。使う場面は違っても「ありがとう」という言葉は集団生活を送るうえで、口にする機会がとても多い言葉です。

感謝の気持ちを伝えるために何気なく発した言葉は、言われた側に感謝されたことへの喜びと、自分が人のために行動したことへの満足感を与えてくれます。そして、二人の間に、温かな空間を作り、幸せな気持ちで包んでくれます。このように言葉には、人と人をつなげる大切な役割があるのです。

私はバレーボール部に所属しています。以前、私がかなかボールを上げられず、チームに迷惑をかけてしまうことがありました。(早くあげない

と。)ということしか頭になく、焦って気づいたら周りが見えなくなってしまいました。そのとき、

「少し前に出てみれば。」

という仲間の一言で、ボールが楽に上げられるようになり、失点が減っていききました。仲間がかけてくれた言葉は、私の心を救ってくれて、チームの向上にもつながったのです。言葉のもつ力の大きさを感じた瞬間でした。

その一方で、言葉によって相手を簡単に傷つけてしまうこともあります。最近、ネット上で他人の悪口を根拠がないにも関わらず投稿する、誹謗中傷が社会問題になっているということをニュース等で、耳にすることが多くなりました。

文部科学省の調査によると、平成二十七年度のネットいじめの認知件数は九一八七件だったのに対し、令和二年度には一八八七〇件となっています。SNSの普及とともに五年の間で倍以上に増えているのです。私はこんなにも多くの子供たちがネットいじめを受けていて、苦しい思いをしていることを知り驚きました。

言葉は、時に人を苦しめ、たった一つの大切な命を奪ってしまうことがある、とても恐ろしいものなのです。私も、身近なところで「死ね」「消えろ」といった乱暴な言葉を聞くことがあります。言っている人は、特に何も考えずに言っているのかもしれませんが。しかし、言われた側は辛い思いをしているのです。

嫌な思いをするからといって、言葉を使わずに生活することはとても難しいことです。では、言葉を用いて、良好な人間関係を築いていくには、どう

したらいいのでしょうか。

私の通っている中学校は、二つの小学校の卒業生が集まります。中学校に入学した二年前、クラスの半分が初対面の人の中で過ごす生活が始まりました。人と関わるのが得意ではない私は、(嫌われたらどうしよう。)という不安な思いが膨らんでいました。しかし、今では休み時間を共に過ごしたり、分らないことを自ら聞けたりするほど仲の良い友達ができました。今、このように友好的人間関係が築けているのには、自分なりに意識してきた「相手の立場になって発言すること」が大きく関係していると思います。自分が話したことで不快な思いにならないか、迷惑ではないか、相手のことを考えて発言するようにしてきました。それは、仲がよく互いのことを理解し合っている友達に対しても同じです。これらのことが結果として、言うてよいことと言っていないことの区別につながっていたのだと思います。

もし、「相手の立場になって発言する」ということを多くの人が常に意識できたなら、言葉によって苦しむ人が少なくなり、温かい人間関係が築ける世の中になると思います。

私はこれからも、言葉のもつ力の良い面を最大限に生かし、人を勇気づけたり励ましたりしていきたいです。

新たな自分との出会い

静浦小中一貫学校 九年 秋山 雄翔

僕は、どうやって僕になっていくのだろう。それは、人と人との繋がりの中で新たな自分を発見し、相手から影響を受けることで僕になっていくのだと思う。なぜなら様々な意見や考え方を取り入れ、認め合い、尊重することで、また新しい発想が生まれていくことを実感したからだ。

僕はある先生との出会いがきっかけで人を楽しませ、人を惹きつける力とは一体何だろうと考えるようになった。それは、グループディスカッションの授業のできごとだった。僕のグループでは、様々な資料をかき集め、下調べをし、みんなで意見を出し合おうという案が出た。そして、ポイントとなる内容を各々で出し合い、意見を繋ぎ合わせていくという方法をとった。すると、そこには自分では通り過ぎていた、興味を持たず、重要であるとは思えなかった内容や、自分では考えつかない発想や意見がたくさん出てきたのだ。

僕は初めて出会うその意見を自分の中に受け入れるために、相手の思いを理解しようとしたり、共感したり、尊重したりしながらそれらを繋ぎ合わせていた。その結果、自分の意見が事前に調べた内容より、遙かに深く、より詳しく、興味深いものに仕上がっていくのがわかったのだ。その後グループごと代表者の発表を終えると、そこまで自分たちの意見を、黙ってうなずき、時に笑顔で寄り添い聞いてくれた先生が、僕達の調べた内容に当て

はめながら、さらにまたより深く、分かりやすく説明をして下さったのだ。その授業に僕はいつまでも惹き込まれ、僕の興味や関心は引き立てられていくのだ。

いつも行われているその授業の中で、僕はふと自分を見つめ直す瞬間があった。今まで自分の意見や考え方の中で生きていくのが、当たり前のように感じていた自分は、様々な人の情報や意見に耳を傾け、相手の考え方を理解しようとしていたのだろうか。そして、それを新たな発見として受け入れていくことが出来ていたのだろうか。僕は、ただ自分の意見を理解し、共感してもらえることに満足していたのではないか。僕はその瞬間、自分がとても小さく、なぜか恥ずかしく感じるようになった。それと同時に、惹きつけられる力とは、人の意見に興味深く耳を傾け、意外な発想を受け入れる事で、その内容を違った角度から見た時に、生まれる新しい見方から生まれてくるものだと思った。そして、その先には新たな自分や考え方が生まれていくことを発見したのだ。

人はみな違う思考や発想をもって、分かち合うから面白く、新たな自分の考え方に出会い、成長し合えるのだ。

僕は今年、生徒会副会長に立候補した。その理由は、約八年前開校の年に入学した僕が、一期生としてこの学校を去ってしまうからだ。この学校で学んだ様々な伝統や、学校の良さ、楽しさをこれからも引き継いでもらいたいと強く感じたからだ。

そして、この学校で出会った、先生方や仲間たちと過ごしていく中で、学年を越え分け隔てなく、相手を認め合い、助け合い、お互い惹かれ合いなが

ら、みんなが最高の学校生活を過ごしていきたくないと願っている。そうすることで、また新たな自分と出会うことができるということをもみんなに知ってほしいから。

自分の足元に目を向けて

愛鷹中学校 三年 田村 莉瑚

皆さんは、道に捨てられているゴミに意識を向けたことはありますか？

正直に言うと、私はありませんでした。テレビなどでポイ捨てに関する特集やニュースを見かけると「なんでそんなことをするんだろう」と思いつつも、どこか自分には関係のないことだと思っていたのです。

そんな私がポイ捨てに関心を持ち始めたきっかけは、少し前から祖母が散歩ついでにゴミ拾いを始めたことでした。私も春休みに入ったので、一緒に祖母の散歩について行くことにしたのです。

歩き始めてすぐに祖母の手持ちの袋がいっぱいになってしまったのを見て、私はかなりびっくりしました。去年の夏休みも一緒に散歩に行ったのですが、こんなにゴミが落ちていた記憶は無かったです。

ペットボトルや空き瓶をはじめ、中身の入ったコンビニ弁当、中にたくさんタバコが詰められたコーヒー缶など、ありとあらゆる場所にいろいろなものが捨てられており、中にはゴミを袋に詰めて丸ごと捨ててあるものもありました。

私もゴミ袋を持つのを手伝いながら家に帰ると、祖母は袋を開けて、汚れているプラスチック容器などをひとつひとつ洗い始めました。

「汚いからやめなよ、全部燃えるゴミに出しちゃえばいいじゃん。」
と私は思わず声をかけました。しかし祖母は、

「そうしたら楽だけど、ちゃんと洗えばプラスチックゴミに出せるから。」
と言いました。私は、どうして祖母がそこまでしなければならぬのだろう、
となんだか納得できない気持ちになりました。

それから春休みの間、私は一緒に散歩について行きました。祖母は背中
を悪くしているの、やはりゴミを捨てるのも運ぶのも大変そうでした。

ある時、私は「どうしてそんなに大変な思いをしてまでゴミを捨てるの？」
と聞きました。

祖母は、

「ここは元々自然豊かで緑の綺麗な場所なのに、それがゴミで汚されてい
るのを見て見ぬふりはできなかったから」

と答えました。

それを聞いて、私は自分で思うよりもずっと自分の住むこの地域に関心
が無かったことに気がついて、恥ずかしくなりました。

ポイ捨てを行う人のほとんどは、ポイ捨てをいけない行為だと理解して
おり、他のポイ捨てをする人に対しては批判的な意識を持っています。

ではなぜポイ捨てをしてしまうのでしょうか。

それは周りが誰も見えないからです。実際に「ポイ捨てされたゴミの量
を調査している」と回答した市区町村はわずか全体の約十パーセントしか
おらず、残りの約九十パーセントは自分達の住んでいる地域にどれだけゴ
ミが捨てられているかを知らないのです。

人は興味のないものは目に映りにくいです。私も、祖母と一緒にゴミ拾い
を始めるまでは、こんなにポイ捨てされているとは思っていませんでした。

この関心の無さこそが、ポイ捨てしやすい環境を作ってしまったのでは
ないでしょうか。

私は散歩をしている間、どのようにしたらポイ捨てを無くせるのかを考
えていました。先ほど述べたように、ポイ捨てする人は「いけないことをし
ている」という自覚があります。つまり、罪悪感があるのです。

例えばタバコの吸い殻のポイ捨て。

もし小さい子供が口に入れてしまったら？

もし火が消し切れていなくて火事が起きてしまったら？

このように、想像しやすい身近な事例を用いたポスターや看板が目に入
れば、ポイ捨てしようとしている人は踏みとどまってくれるかもしれません。
また、地域の人が見れば、今まで気付かなかった足元のゴミに目を向けるき
っかけとなるでしょう。

私は現在、環境委員長を務めています。

春休みが終わり、毎日祖母と散歩することはできなくなってしまいまし
たが、その分委員会での取り組みに力を入れています。

その一つとして、外国のポイ捨て対策の紹介や3Rについてなど、環境に
関する情報を、生徒会と連携しながら発信しています。この活動を通して、
ゴミの分別の大切さを知り、環境を守ろうとする思いを持ってほしいと考
えています。

まずは、私の通う愛鷹中学校から環境への関心を高められるようにこれ
からもがんばっていきます。

本当の「私」

大平中学校 三年 河野 莉月羽

人から見た私と、自分で思う私が噛み合わない。

「この色あなたっぽいね。」

「あなたはいつもこうやって動くからそのままいいんだよ。」

学校の私と家での私、外で過ごすときの私、同じ私を指しているが、たくさん私の存在しているように感じるときがある。本当の私とはいったいどこにいるのだろうか。

学校に行き、元氣よく友達や先生に「おはよう」とあいさつをする。毎日欠かさずに行く私の日課だ。授業中、分からないことがある時には、すぐに先生を呼び、教えてもらったり、グループでの話し合いに参加したりする。他の班とも交流し、様々な考えを見て回る。休み時間は、友達や先生とコミュニケーションをたくさんとっている。しかし本当の私は、友達と仲良くするために、無理にテンションを上げて話したり、人に合わせた話し方や話題を考えたりしている。そんな私を見て友達は、

「テンションが高くて、大雑把な性格だよな。」

と言う。これが、学校での私。

家に帰ると、「ただいま」という一言さえも言わず、すぐに自分の部屋に向かう。これもまた、私の日課だ。その過程で、家族との会話はあまりない。家族と話をするのは、夕食の時間や学校からの連絡程度だ。私は自分の時

間を優先して、家族とはあまり話をしない。周りのことには見向きもせず自分中心に考えて家族に気を遣わせてしまっている。これが、家での私。

学校では、うるさいぐらいの声で笑い、友達と過ごす時間を楽しもうとしている。友達と話をするのは大好きだが、友達の前で自分を出し切れない私がいる。一方で、家に帰ると、趣味や委員会の資料づくりなどに没頭して無口な私になっている。さらには、人と関わることを面倒だと思ってしまう。学校で人に合わせ、家では自己中心的。どちらも私。その他にも親戚や地域の方と話をするときの私……。私の顔はたくさんある。それだけ色々な自分を持っている。

「莉月羽って人によって雰囲気が変わるね。」

人と言われて初めて気付いた。私について話しているはずなのに、まるで別人のように感じるときがある。そんな時に、「みんな違ってみんないい」という言葉を思い出した。この言葉は、他者の個性を認め合うことを表していると聞いたことがある。私はたくさんいる私にたとえて考えた。私の中には、たくさん私がいる。そんな違いがあるところも全て私なのだ。

本当の私はどこにいるのか。学校生活で着飾っている私？無口で他を寄せ付けようとする私？他者から押し付けられた私を肯定する私？どれがではなく、実はその全てが私なのだ。「こんな私は私じゃない」と思い込み新しい自分を知ることが怖がり、目を背けていただけだった。これは私じゃないと否定していたのは、「周りの目」や「こんな自分でいいのか」という不安からだ。それを知ったとき、私は初めて今の私の全てを自分として受け入れることができた。

だから、人から思われている私も、自分が思っている私も、これから現れてくるかもしれない私も、全ての私を受け入れて、進んでいきたい。

私の役割

長井崎小中一貫学校 九年 渡辺 奈央

みなさん、自分の住んでいる地域の魅力について、すぐに説明することはできますか？私は、今までは西浦と言えば「寿太郎みかん」についてくらいしか話すことができませんでした。しかし、今はこの長井崎校区について、たくさん魅力を紹介することができます。

なぜ、私が魅力をたくさん紹介できるようになったのか、それはこの「うらうち」という冊子の制作に携わったからです。

この冊子は、「コロマガプロジェクト」の一環として作られています。地域の小中学生が地域の取材に行き、プロのクリエイターさんの指導を受けながら、文章、絵、写真などを整えて冊子を作り上げます。九年前に伊豆市から始まったこのプロジェクトは、今現在六箇所で行われていて、発刊の準備をしている地域も全国各地にあり、どんどん広がっています。

そして、一昨年から、この内浦・西浦地区でも「うらうち」という名前の冊子作りの活動が始まりました。私はこれに一年目から参加していて、これまで十箇所以上の場所に取材に行ってきました。この制作に携わるなかで、色々な発見や楽しさ、喜びを感じてきました。それを皆さんにもお伝えしたいと思います。

まず一つ目は、学校での地域学習で学んだこと以外にも、取材を通して自分の地域の魅力を発見することができるということです。私の場合、小

学校では「みかん学習」や「大瀬学習」「水産教室」などの学習をしてきましたが、それは地域の大半の人が知っていることで、この地域の魅力のほんの一部ではありません。しかし、「うらうち」の取材のなかで、今まであまり聞いたことがなかった「うずわ味噌」のことを知ったり、あまり詳しく知らなかった「北条水軍の歴史」について勉強したりして、普通に過ごしていたら知らないままになっていたかもしれないことを知ることができました。このような体験は、この活動でしか味わえないものだと思います。

二つ目は、他の地域の人との交流です。昨年十一月頃に「コロマガサミット」という催しを「コロマガ」の一番先輩である伊豆市の「くるら」の活動に携わっている大学生の方々が企画してくださいました。この「コロマガサミット」では、今現在様々な地域で同じように活動を行っている人同士でレクをしたり、それぞれの地域や活動を紹介しあったりしました。そこに集まっているのは同じように地域活動をしている人たちなので、みんなそれぞれ（この活動を通して地域を盛り上げたい！）という思いが、発表からひしひしと伝わってきました。私は、初対面の人とコミュニケーションをとるのがあまり得意ではないのですが、色々なレクと一緒に行動する中で、少しずつコミュニケーションをとれるようになりました。

そして、一番の喜びは、冊子を通してこの地域を知らない人に発信することができるということです。取材を通して発見した地域の魅力をその地域の内外の人たちへ発信することは、その地域を全く知らない人にとってはそこを知るきっかけになり、そこに住んでいる人にとっては地域の魅力を再発見するきっかけになります。そして、自分が書いた文章や絵、撮った写真

がきっかけになってこの地域に興味をもってくれる人がいると、記事を書いた達成感やそこでのしか味わえない喜びを体験することができます。

また、この冊子を作るうえで、専門のライターさんやイラストレーターさん、デザイナーさんなどからの指導も受けられるので、文章を書くのが好きだとか、絵をかくのが好きだとかいう自分の特技を伸ばすことができるのも楽しさの一つだと思います。

この活動を通して、地域の新しい発見は自分の中に閉じ込めておいては地域の活性化にはつながらないことに気づきました。だからこそ、外へ発信するということが大切だと感じました。また、小中学生のときに、このような体験をすることで地域の魅力を感じ、大きくなってここを離れても、また戻ってきたいと思えるようになるのではないのでしょうか。そして、自分たちの地域をどうしたら活性化に繋がられるかを考える力を身につけることができると思います。

地域を活性化させるために、これからもこの活動を続けていくことが私の役割だと思っています。

感謝の主張

原中学校 三年 黒田 百花

私は友達が多くない。自分から人に話しかけることが苦手で、どちらかといえば一人である方が気楽だと思っている。

人間関係はとも複雑で難しい。親友だと思っていた友達が他の子と仲良くして嫌な気持ちになったことはないだろうか。自分にもその親友以外に仲の良い人はいるのに、嫉妬したり悲しくなったりする。人と関わるということは、苦しい思いをすることも必ずある。でも、ご飯は誰かと食べた方がおいしいし、友達との日々の何気ない会話はとても楽しい。人と上手く付き合うということは非常に難しいことなのだ。

人と人との繋がりを糸で例えると分かりやすい。一人からは多くの糸が出ている。その糸は友好的な糸だとは限らず、敵対的な糸もあるだろう。時間がたつにつれ脆くなり千切れてしまう糸もあれば、時間がたつても変わらず強固な絆で結ばれている糸もある。一人から多くの糸が出ているから、複雑に絡み合いほけなくなることもあるだろう。これが人と人との繋がりがりだ。

ここで問いかけてみたい。人間関係は「広く浅く」か「深く狭く」のどちらが良いか。「広く浅く」のメリットは、視野を広げられる点だ。少数の人に固執するのではなく、多くの人と関わることで様々な経験をすることができ、自分の視野を広げられるだろう。デメリットは、深い関係を築けず、本当に

自分が困ったときに頼れる相手がいないという点だ。では、「狭く深く」はどうだろうか。メリットは、友達の一人ひとりを大切にできる点だ。自分が相手を大切にすることは、相手も自分のことを大切にしてくれて、良い関係を築くことができる。デメリットは、視野が狭まるという点だ。一定の人としか付き合えないということは、新しい出会いや経験が少なくなり、自分の意見などが偏ったものになることがある。私は、「狭く深く」が私に合っていると思う。冒頭で述べたように、友達の少ない私にも長い付き合いの友達が二人いる。私達は三人でとても仲が良い。私は彼女らが大好きだ。ある日、二人の内の一人から私ともう一人に手紙が届いた。彼女は私の一つ年上で今年中学校を卒業した。そんな節目に書いてくれた感謝の手紙だった。私達が出会ったときのこと、今までの思い出、感謝。様々なことが事細やかに綴られていて、本当に嬉しかった。なにより、携帯ですぐにやり取りができるこの時代に、わざわざ手紙という手段を選んでくれたことに感動した。そして、この一節に私は大きく心を動かされた。少し、読みたいと思う。

「今年君は受験生で大変な思いをすることもたくさんあると思う。けど、私は君がどんな選択をしてもどんなときでもいつまでも君の味方です。おちやらけているけど、常に何かと頑張っている君を陰ながら応援しています。しんどくなったらいつでもラインしてね。」

私の弱いところを分かってくれている人がいる。見守って支えになってくれる人がいる。私はそれだけで十分だと思った。こんなに素敵な友達に恵まれているのだから、多少友達が少なくなっても構わないとも思った。だから私

は「狭く深く」が合っている。今いる友達を大切にすること、これが私にとって最も重要なことだと思うからだ。人間関係は「広く浅く」、「狭く深く」のどちらが良いか、なんて問いかけもしたが、きっぱりとどちらかという答えはないと思う。きっと一人ひとりに合った人間関係の築き方がある。今は深い絆で結ばれた相手はなくても「広く浅く」付き合っている内に深い仲間ができるということもあるだろう。焦らず自分なりに人と関わっていくということ大事にしてほしい。

彼女からの手紙は、身近にいる大事な友達に感謝を伝えることも大切な主張ということを思わせてくれた。だから、いつもは伝えられない感謝を今ここで伝えさせてほしい。一人でいることの多かった私にたくさん話しかけてくれたり、毎日一緒に下校をしてくれたり、誕生日を盛大に祝ってくれる私の大切な友達へ。いつもありがとう。

知ってほしい個性

浮島中学校 三年 田中 愛子

なぜ、こんなにも悩んでしまうのだろう。そう、何度も思いました。他人には平気なことが、耐えられない。他人には普通のことだが、難しい。これを聞いて、障がいと思いつかれましたか？それとも心の病気だと思いましたが？

いいえ、どちらも違います。それは個性です。この世界では、一人一人が個性を持ち、感じることも、考えることも、それぞれ違うはず。しかし世の中には、他の人についていけず、同じ感覚を持ってないだけで、生きづらさを感じてしまう人々がいるのです。なぜか。それは周りの人たちがその人のことを理解しようとしていないからです。

そこで今、ある一つの個性についてお伝えしましょう。我慢強く、繊細で優しい人々が持つ個性です。その個性とは、HSPです。「ハイリー・センシティブ・パーソン」という言葉の頭文字をとってHSPと呼び、「非常に感受性が強く敏感な気質を持った人」を意味します。つまり繊細な人ということですね。みなさんの中に繊細な人は弱い人、というイメージをお持ちの方はいまいませんか？実はHSPの人々は繊細ながらも強い心の持ち主であることが多いのです。それゆえに、何かをしなければならぬ、と自分を追い込むことも多くあり、さらに他人と関わる上で自分を責めてしまうことがたくさんあります。HSPは自分に厳しい人が多いのです。だからすぐに疲れてしま

います。また、影響されやすく、感情が豊かです。だから、ちょっとしたことで驚き、ちょっとしたことで喜びを感じることができるとです。そして、相手の感情をくみとることがとても得意なのです！HSPの人は話しやすい人と思われることがあります。それと同時に、誰かが怒っていると悲しくなったり、誰かが落ち込んでいるとき一緒に落ち込んでしまうことがあります。彼らは、周りの感情に左右されやすいのです。

今、HSPの特徴について少しお話しましたが、性格として、誰に当てはまってもおかしくない、よくある性格だと思いましたが？私はそう思います。実は世界で五人に一人はHSPだと言われています。とても身近に感じられるのではないのでしょうか。

そんなHSPですが、自分がそうであると分かっていない人が多いのです。そして、HSPには、種類があったり、人によって度合いが違ったりします。例えば、人と話すのが好きな人もいれば、一人でじっとしているのが良い人もいます。「あっ、自分はHSPかもしれない」と思ったら、きっとあなたはそうなのでしょう。それは数ある個性の中で、HSPが当てはまっただけに過ぎません。

ではなぜ、HSPであることを知るの大切なことなのでしょう。私は、この個性を知るきっかけとして、HSPであることを告白する投稿を見ました。その人は、HSPであることを知って、自分がショッピングモールなどの人混みですぐに疲れてしまうことを知り、自分が今どのくらい疲れているのかがわかってくるようになったと話していました。私はHSPのことを調べ、自分がどのようなHSPであるかを知ることが、自分にとって何が辛いこと

であるかを知るための大きな手がかりとなると思いました。

HSPかなと思った人も、そうでない人も、ぜひ一度調べてみてください。こういう人がいるのだなと知るとは、非常に大切です。

なぜ、こんなにもだめなのだろう。HSPの人々は何度も悩みます。しかしそれは深く考えるのが得意であるという証です。私はたくさんの人にこの個性を知ってほしいのです。なぜなら私もHSPかもしれないからです。

たとえ小さな一歩でも

門池中学校 三年 芳賀 絢介

今、世界はロシアのウクライナ侵攻をはじめ、様々な問題や困難に直面しています。

例えば、アフリカでは貧困問題によって経済的に苦しい生活を送っている人々が存在し、他民族どうしが多く暮らす国では差別やいじめによって、平等に安心して暮らすことができない人々がいます。私はこのようなニュースをテレビで見るたびに、「みんな」で助け合えば問題はすぐに解決できるのに、と思っていました。しかし、よく考えてみると、私が言う「みんな」には、「私」は入っていないのです。それはきっと、どこか遠い世界の他人ごとのように考えてしまっていたからだと思います。このまま何も考えずに行動できなかつたら世界も私も何も変わらない。自分にできることは何かないかとまず身近なことから考えました。

以前、学校で、先生がお茶をこぼしてしまったのを見たとき、私はとっさに行動することができませんでした。今でも、(雑巾を持っていくことはできなかったのか)と、後悔しています。私は相手の気持ちを想像し、勇気を持って行動することが苦手です。

みなさんはこのような場面にあったとき、すぐに行動することができませんか。困っている人がいたとき、どんな小さなことでも一歩を踏み出し手を差し伸べることができたら、その人の気持ちは救われるのではないでしょう

か。そんな小さな勇気を積み重ねることで、小さな一歩が大きな行進に変わっていくのではないかと思います。きっと私と同じように、周りがやらないならいい、誰かがやってくれるだろうという考えの人は大勢いると思います。

では、勇気を持って一歩を踏み出すために何をしたら良いのでしょうか。それは、日常生活の中で起きた問題に対して、見て見ぬ振りをするのではなく、自分一人でも行動するという、些細な勇気の積み重ねをすることだと思います。それが「みんな」を救うための第一歩だと思います。その思いが広がっていけば、みんなに温かい気持ちが伝播し、大きな流れになっていくでしょう。

私はこれから、もし仮に仲間はずれにされたり、インターネットで陰口を言われている友人がいたりしたら、自分には関係ないと思わずに、声を掛け、解決策と一緒に模索して助けてあげたいと思います。また、街で高齢の方やベビーカーを押すお母さんを見かけたら、勇気を持って「お手伝いしましょうか。」と、声をかけたいです。そしてその姿を見た人が、次は自分も行動しよう、と思うきっかけになれば助け合いの輪はどんどん広がっていきます。今の私にできることは小さなことかもしれませんが、身近なできることから一歩一歩積み重ねていきたいです。

そして、そんな小さな多くの温かい勇気は、いずれは世界に広がっていくと思います。多くの人の助け合いの輪が広がれば、いずれは日本、そして世界中が一つになり、お互いを助け合える関係ができあがると思います。

世界情勢を見ても分かるように、お互いの立場や考え方は違うのかもしれない

れません。世界平和の実現は非常に難しいことなのかもしれません。しかし、目の前の困っている人を助けたいと思う気持ちは、世界中の誰もが持っていると思います。色々な国の人が、それぞれの歴史や宗教によって違う価値観を持っていても、目の前の小さな助け合いは誰でもできることだと思います。そして、私たち若者が率先してそれを行い、立場や考え方の違う大人たちの心を少しでも動かすことができたらずら良い方向へ物事は動いていくはず。ぜひみなさんも助け合いの輪をつくる世界の一員として、たとえ小さなことであっても行動してみようか。どうでしょうか。私自身も一歩一歩、身近な些細なことから思いやりと勇気を持って行動したいと思います。そして、ニュースを観て感じていた「みんな」に自分も入っていると、堂々と言えるような人間になりたいです。

父の教え

今沢中学校 三年 古屋 愛花

「当たり前の日々が当たり前に来るのは有り難いことだ。関わる人全てに感謝しなさい。」これは、父が私によくいう言葉だ。そのときの私はその言葉を切実に受け止めてはいなかった。しかし、その後、この言葉を意識するようになるある出来事に私は出会うことになる。

それは風雨の強いある日のことだった。母と兄は買い物へ行き、父と私は家で留守番をしていた。（兄が帰って来たら、一緒にゲームしてもらおう。）なんて考えていたいつも通りの昼下がり。ドアを開く音がした。「おかえり」と私が言う前に母が「パパ、大変！人が倒れてる！」と告げた。私はすぐには動けなかった。父が慌てて外へ出た。その言葉で私の意識は現実に戻された。外には買い物袋を持ったおばあさんが倒れていた。青白い肌、買い物袋からこぼれ落ちたネギ。私はあまりの恐怖に自分の顔から血の気が引いていくのを感じた。「タオル持ってきて！」父が叫んだ。兄は急いでタオルを取りに行った。私は見ているだけだった。やがて救急車が着き、おばあさんは運ばれていった。呆然としていた私を父も母も無言で抱きしめ、頭を撫でてくれた。（怖い。）その思いで胸が一杯になった。あのおばあさんが持っていた買い物袋が、私により死を身近に感じさせた。

その日私は、いつも通りの日常がいつか終わってしまうことを思いしらされた。もし、これが私の大切な家族だったらと考えると不安になった。私を

大切に育ててくれる父や母、勉強を教えてくれる兄や先生、私の相談のつてくれる友達。特別でない毎日も、そしていつもいる人たちも、当たり前だからこそ永遠に続くように感じ、その有り難さに気が付けない。私は関わる人に感謝出来ているのだろうか。どうしたら父の言葉のように生きていけるのだろうか。幼い子供でも言える「ありがとう」の一言を身近な大切な誰かに伝えることができない。分かっているけど、感謝を言葉にして伝えることは照れ臭く、そんな自分を齒がゆくも感じる。

二〇一九年、とあるチョコレート会社が二〇代と六〇代の男女五〇〇名を対象に「ありがとう」に関するアンケートを実施した。声に出して「ありがとう」と伝えている回数は一日平均十回未満。その中に私を驚かせた結果があった。二十代女性が最も多く一六・八回に対し、六十代男性は二・四回。二〇代女性と六〇代男性の差は一四・四回。七倍もの違いがあったことだ。中学生より社会に出て人と関わる機会が多い大人の結果が、年を取ることに減っていく現状に不思議さを覚えた。

では「ありがとう」と声に出して伝えるとどのような良いことがあるのだろうか。なんと「ありがとう」と「声」に出して伝える人ほど幸福度は高かった。そして何より大切なのは、文字より声に出して言われた方が八・四倍嬉しいということだった。

これほど「ありがとう」と言うことは良いことだとわかっているのに、声に出さないのはなぜだろうか。その理由はとても単純だ。「きっかけがない」「恥ずかしい」という感情が私たちに上手く感謝を伝えられなくしているのだ。実際に自分も「ありがとう」と言われるのは嬉しいのに、いざ自分が

言うとなると途端に恥ずかしくなり、言葉にできないことが何度かあった。

ある日の帰りの会。偶然、まだ配られていない配布物を見つけた。私は、支度も終わって、時間に余裕があったので、配達をし始めた。みんな無言で受け取っている。(見返りを求めて配達している訳ではないが、感謝ぐらいしてもいいのではないか。)そんなことを考えていたとき、一人の男子が「ありがとう。」と声を掛けてくれた。とても嬉しかった。その一言で配って良かったと思えた。そして当たり前のようにさらりと「ありがとう」を言える彼を素敵だなと思った。彼のように自然と感謝の言葉を口にするのができるようになりたいと思った。

コロナの影響で人に会うことが難しいこのご時世。だからこそ、身近な人に感謝を送る時間にしたい。自分の周りには、いつも支えてくれている人がいる。そんなすべての人に私は「ありがとう」と笑顔でさらりと伝えられるような後悔のない人生を送りたいと考える。当たり前の日々に感謝して生きていく。これが私のこれからの生き方だ。

「常識」について考える

市立沼津高等学校中等部 三年 遠藤 才門

「常識とは十八歳までに身につけた偏見のコレクションではない」

この言葉は、特殊相対性理論や一般相対性理論を提唱したことで知られる、アルベルト・アインシュタインが残したものです。私は彼のこの言葉と出会い、深く考えさせられました。

「常識」という言葉の意味を辞書で調べると、「健全な一般人が共通に持っている、または持つべき、普通の知識や思慮分別」と記されています。この説明どおり常識とは、人々が社会で共存していく上で必要不可欠なものです。すべての人々がそれぞれ自分で違うルールを持っていて、自由に行動しているようでは社会は成り立たないからです。

そのような「常識」ですが、人によって異なるという側面もあります。人は一切の知識を持たずに生まれて、成長していくにつれて知識を増やし、自分の常識を形成していきます。そのため常識が、環境や関わる人、経験することによって異なってしまうのはいたって自然なことなのです。

しかし、人はしばしば自分と違う常識を持っている人と出会ったときに、反発することがあります。そのように考えるようになった実際の出来事があります。

私が小学五年生のとき。様々な世界の文化を学ぶという授業でのことです。先生が皆の前に立って教科書の文を読んでいき、授業は進みました。私

が気になったのは、手食文化という文化が紹介されたときです。手食文化とは手で直接食べ物を扱って食事をするという文化のことです。その説明を聞いた瞬間、教室のあちこちから

「信じられない」

「絶対に無理」

といった完全否定する声が聞こえてきました。私も、日本で暮らしてきたのでそのような気持ちになるのは分かります。

しかし、授業内では言われなかったものの、世界規模で見ると手食をする人の割合が最も多いとされていて、我々日本人のように箸を使って食事をする民族のほうが少ないのです。小さい頃から行ってきて、常識だと思っていたことが、どこでも通用する絶対的なものではないということを痛感しました。

現在、世界中で問題となっているいじめや差別。これらも「異なる常識への反発」とつながるものがあると思います。例えば、集団のなかで人とは異なる言動をする人に嫌悪感を抱き、みんなが悪口を言ったり、仲間はずれにしたりすること。多くの人たちとは違う身体的特徴を持って生まれた人を理解せず、気味悪がったり、敬遠したりすること。どれも、自分の当たり前や常識とは違う人への拒否反応です。

もう一つ、私がこの問題について考える機会がありました。二〇二一年に開催された東京パラリンピックです。どの選手も自分の限界を超えようと必死に競技し、私も家でテレビ越しに観戦をしておおいに熱狂しました。世界には色々な人がいて、一人一人が自分なりに全力で生きているのだなど

感じました。

そこで私は、辞書に載っている「常識」という言葉の説明で使われた「健全な一般人」や「普通」といった言葉にますます違和感を覚えました。

「健全な一般人」という言葉では表せないような人もたくさんいるなかで、大切なのは、色々な考え方や生活があつてどれも素晴らしいという思考です。LGBTQや人類の平等などが話題になっている今こそ、自分の中の常識を疑い、多様性を認め合い、共存できる社会を目指す必要があるのではないのでしょうか。

自分の持っている常識が絶対的なものではないと理解し、世間で普通だとされているものを常に疑い続けるということ、互いに多様性を認め合うことが大切だと思えます。そして多様性を認め合うことが世界中の常識になつていくと、より多くの人が幸せになれると思えます。アインシュタインは「偏見のコレクション」という言葉で偏見や思いこみを持ってしまうことの危険性を伝えたかったのではないかと思えます。私自身も普段から友人や家族、知らない人のことも理解しようと努力し、自分の想いを伝播させていきたいです。

行動してみる 考えてみる

戸田小中一貫学校 九年 岩瀬 悠

「いらっしやいませー!!」

私は、沼津市の戸田にある旅館の息子です。旅館の息子という聞こえはいいですが、いろいろと大変なことがあります。

例えば、重い食べ物や飲み物を運ぶことです。運ぶときには「最悪だ! なんでこんなに重いものを運ばないといけないんだよ!」と思いつながら運んでいました。

また、接客もやらなければいけない場面が多くあります。

「コンビニはどこですか。」

「自動販売機はどこですか。」

という質問があり、そのことに応えます。それくらいならいいのですが、手伝いの身の私に、

「車の鍵を預けたんですが、返してくれますか。」

という要求もあるので、私は

「えーと。少々お待ちください!」

と対応するのですが、心の中では、

(いや、おれは知らないよ!)

と思つてしまいます。本当にお客さんへの対応は、難しいです。

ですが、旅館の息子で良かったこともあります。それは、お客さんから感

謝をされたり、両親が喜んでくれたりすることです。

自分としては仕事をこなしているだけのつもりでしたが、

「頑張っているね。」

と言ってくれるお客さん。

「手伝ってくれてありがとう。」

と言う母。

大変なこともあるけれど、そう言ってもらえるとうれしい気持ちになります。

旅館の仕事は自分自身が成長できる場だと思います。周りのために何かして、成長できる。素晴らしいことだと思いませんか。

さて、それは、部活でも同じことだと私は考えます。私は、ソフトテニス部の副部長です。実は、部長のサポートをしようとしても上手くいかないこともありました。

私が「集合！」と言っても、自分の声が小さくて全員が集まらなかったことが何回もありました。そのたびに、私は（うーん。やっぱり自分はまだまだだなあ。）と思ってしまいました。

また、部長と練習メニューを決めるときには、自分は案を出さないうで部長の案を聞くことしかできないこともあり、自分だけで決めるといつも同じメニューになってしまうこともありました。（やっぱり自分はまだまだだなあ。）その時、私は思いました。あれ？これって旅館の仕事と一緒にやらないか。

そこで私は思いました。まずは自分のためにやるのではなく、人のために

やってみようと。そう考えた途端、今まで上手く行えなかったことが行えるようになってきました。

私が大きな声で「集合！」というとき全員が返事をしてくれるようになりました。部長と練習のメニューを決めるときには、自分から案を出すこともできるようになりました。

一人で考えるときにはいつもと同じにならないように部員の課題を考え、それに合った練習のメニューを考えることもできるようになりました。

みんなのために、自分から考えたり行動したりすることはとても大切だということがわかりました。

また、それは旅館の息子であることから学ぶことができました。今何をすべきなのか考えたり、この行動をすることができれば、誰かのためにもなるのかな、ということも考えたりするようになりました。

考え、行動することは、将来に必要な力です。旅館だけでなく、何の仕事でも考え、行動することで、前向きに進むと思います。私は、そのことを、部活や旅館のことから学びました。自分の殻を破り、変わることができました。

私は旅館の息子であり、部活の副部長であり、大変なときもあります。

そんなときは、今のこの気持ちを大事にして、日々の生活に活かしていきます。そして、これからも考え、行動していきます。

「いらっしやいませー！」「集合！」

明日に向かって。未来に向かって。

他の人とは違う何かに苦しんでいる人へ

加藤学園暁秀中学校 三年 土屋 心優

今、あなたのまわりに病気や障害を持っている人はいますか。そもそも障害を持っている人がこの世界中に何万人いるか知っていますか。私たちはまだ障害や病気についてあまり詳しく知りません。いや、知ろうとしていないのです。自分だけでなく、色々な人が幸せになれるようにまずは実態を知ることから始めていきましょう。

実は、障害のある人の人数は世界人口の約十パーセントです。「なんだ、たったの十パーセントか。」と思った人もいるかも知れませんが、数にして考えてみると十億人です。さらに、人口増加、医学の進歩、および高齢化にしたがって増加していきます。私は最初に人数についてお話ししましたが、障害の種類は必ずしも身体的なものだけではありません。もちろん、身体障害者が一番多いのですが、今、増加傾向にあるのが、精神障害者です。他にも知的障害者などがあります。私はいま増加傾向にある精神障害と身体障害についてフォーカスしていこうと思います。

まずは身体障害についてお話しします。身体障害とは先天的あるいは、病気や事故などの後天的な理由で身体機能の一部に障害が生じている状態のことをいいます。主に、足や手が動かなくなるケースが多いです。そのような人は、義足を付いたり、車イスにのったりと色々な工夫をしています。

もう一つは精神障害です。精神障害とは、何らかの脳の気質的な変化あ

るいは、機能的障害が起こり、様々な精神症状、身体症状、行動の変化が見られる状態です。精神障害になる理由は様々ですが、主な理由として三つ挙げられています。一つ目は認知症や頭部外傷など、脳に明らかなダメージの結果生じる病気です。二つ目は、統合失調症やうつ病を代表とする脳内の明らかな機能異常が想定される病気、三つ目は適応障害やPTSDなどの心理的なストレスが主な原因と考えられる病気です。「心理的ストレス」というのは、「心の病」と表現されることが多いです。そんな心の病を持ち苦しんでいる人が、この世界にはたくさんいるのです。

その中でも、ある一人の男性にお話を伺いました。その男性は持病である自閉症を持ちながら、私たちと同じような中学校に通っていました。しかし、男性は周りの人と同じようにじっとしていることが出来ません。他人の話にもすぐについていきません。そのため、その男性は、だんだん差別を感じるようになり、とうとういじめまで発展してしまいました。男性は不登校になり、精神障害になってしまいました。精神障害にも、自閉症にも、完璧な治療法というものがありません。男性はとても苦労したことでしよう。今その男性は、週二回のカウンセリングに通って仕事が出来るところまでは、持っていたそうです。今回は、一人の男性についてお話ししましたが、このような方が世界にはたくさんいるのです。もしその男性の学校に、自閉症や精神障害を理解出来る人がいたら、男性は苦労しなかったのかも知れません。

私が、この話をして伝えたかったことは、私達が障害をもっと理解すれば、未来が変わるということです。そのためには、「心のバリアフリー」が大切で

す。「心のバリアフリー」は、バリアを感じている人の身になって考え、行動を起こすことです。「〇〇しましょうか?」「お困りですか。」その言葉で救われる人が、この世界中に何人いるでしょうか。自分が住んでいる地域や、使っている交通機関で、苦しんでいる人や困っている人がいないか周りをよく見てください。自分だけが幸せならそれでいいと思わないでください。世界の中で一人でも幸せな人が増えるように、私たちのさりげない優しさで包みましょう。



- 主催 沼津市教育委員会
- 講評 沼津教育振興会国語部部長 須藤 佳久
- 後援 沼津市自治会連合会
沼津市青少年を健やかに育てる会連絡協議会
沼津千本ライオンズクラブ
- 協力 沼津市 PTA 連絡協議会 家庭教育委員会
沼津市立片浜中学校 増山 侑莉 工藤 拓貴
- 副賞提供 沼津千本ライオンズクラブ



青少年健全育成都市宣言

近年、青少年の非行が増加することにとどまらずその低年齢化と悪質化が著しいことは、誠に憂慮に堪えない。

次代を担う青少年の健全育成をはかることは市民の重大な責務である。よって本市の総力を結集して、青少年が明るく健やかに育つまちづくりに邁進することを決意し、ここに沼津市を「青少年健全育成都市」とすることを宣言する。

昭和 55 年 12 月 10 日



大会当日の様子はこちらから

令和4年度 第41回 沼津市わたしの主張大会

令和4年7月発行

沼津市教育委員会事務局生涯学習課

〒410-8601 沼津市御幸町16番1号

電話 055-934-4871

